

〈目的〉奈良時代の服装は唐の影響が強かったが、遣唐使が廃止されたことにより、その模倣も自然にやみ、ついに平安京の宮廷を中心とする生活が展開された。服装に関しても藤原文化の色を濃く現わしはじめ、日本文化として世界に誇り得る「束帯」が生まれた。束帯の中でも一番上に着る「縫臑袍」に焦点をあて、現在の着物との技術的な相違点などを研究してみた。

〈方法〉縫臑袍に関する資料を見ても技術的な面で把握できない部分があることから、実際に縫臑袍を製作することにした。反物は装束専門の研究所に頼んで、輪違綾の白布地を黒に染めていただいた。裏には黒平絹を用いたが、表裏共に糊が強く張ってあるので扱いに注意するようにとアドバイスを受けた。反物は高価なものであることから、奥物面積の半分で製作した。

〈結果〉市販されている柔らかい反物と違い、今回使用した反物はパリパリとした紙のようであるのに驚いた。大きな針目で縫うことになっているが、実際に縫ってみるとそうせざるを得ないことがわかった。細かい目では縫いにくく皺になりやすい。一度ついた皺はなかなかとれずに、布の扱いには苦労した。また形の上では襷があり衿の作り方や付く位置も独特である。これを実際衣紋立てに掛けて見ると、後身頃の方に衿がまわってつり合う形となり、前身頃が長い分を着付の時、懐としてたるませ、それに伴い袖底が後ろにまわり、脇のあきで前身頃と後身頃の長さの違いをうまく吸収していることがわかった。